

武道と禅

# 小川忠太郎範士

## 『稽古日誌』(三)

小川 心耕

昭和18年

1月30日 講談社にて持田先生に願う。(大中寺摂心)

腹力と呼吸。切っ先は相手が入ろうとする所をさからわずに表又は裏即反対にぬいて入るコツ。

礼、蹲踞の時余の心気は腹に納まらぬ、対峙、互いに打つべき所無し、先生まず面に来るもだめ、余近間に入ろうとするが入れぬ。

この間は五分五分、互いに近間、余の左拳と左足とが固くならず、互いに苦しい所、余は切っ先を下げて下にぬく(拳攻め)、小手技にかわり又は中段に攻めて水月に入る、上太刀にぬく(之は中山先生より以前注意されたところ)この近間の攻防も五分五分となる、以上中半。

互いに一足一刀の間となる、先生が攻める所を余は裏に应ずる気となる(之は余の癖也、表面が隙となる)その気の留まったところを表よりスーッと入り真面、続けて四五本打たる、一足一刀より先生が表より面に伸びんとする所をその心の動きを出小手を打つ、先生“参った”という。先生が動かんとする所を小手又は面又は突とゆく、先生からは面が来る、どちらも不十分、以上。

剣道は結局ここだ、気の留まった所が隙だ。本日はいくら稽古しても疲れず腹力ぬけず息あがらず目も見える、座禅と寒稽古の賜物也、昨年末にはこれが無かった。形では左手左足が少し固くなる。

2月18日 国学道場にて斎村先生に願う。

先生に願う前、生徒との切り返しを受けている時心気が少しく動く、息がはずむー腹力（息をとめる）と一刀流の形の切っ先（殊に二本目）。

対峙...先生はまず裏によって攻める、余は之に対し表に開き切っ先にて応ず、互いに間合いと切っ先との攻め合い、近間にならんとした時余は裏突にゆく、先生がグッと出た為には外れる、近間なる故に互いに良い技は出ない、先生が面に伸びて来たのに対し、余は思わずグッと出て利生突一本入れる。

次の先生の攻勢に対し余はグッと真直ぐに出て攻め返す（この攻めは利いた）余の腰は伸び腹力充実す、この態度でグッと攻めると切っ先も生きてくる、利いてくる（従来は斎村先生に願い、こんな心気、切っ先にはなれなかった、押されていた）故に技も出易くなる、真面が二三本あたる、又一刀流二本目の拳攻めより中段に攻め突にゆく、この突も二三本あたる、又、先生が入ってくる所を大きく振り冠り抜いて面を打つ。

最後に互いに遠間となる、この間は相手の動く所を打てばよい、故にどちらも動かぬ。以上で本日は止める。

本日の成功の技は利生突、稽古中腹力がグッと入ってきたことにも成功。一足一刀の大事の攻め合いの所で斎村先生が息を吸う所がある、そこをグッと強く腹腰で攻めると先生の間を制する事を得。稽古中斎村先生の息の聞こえたのは本日が初めてであった。本日の余の欠点は、余が利生突一本突く迄はギリギリの大事の間合いで余が出にくかった、之は先生が先になっている、乗っている証拠也。本日は稽古の時も稽古後も左手も左足も少しも疲れていない、それは凝っていない証、従来は左手左足が凝った。

2月19日 国専道場朝稽古にて斎村先生に願う。

腹力と一刀流の形。

対峙...先生は切っ先を表より乗ってくる、余は之に対し応ず、互いに間と切っ先の争い、昨日よりは先生は腹力を充実させてグングン攻めてくる、互いに近間、初太刀はどちらも不十分、その中先生が腹力と切っ先（体中剣 剣中体）とて差しちがえの気で余の腹部を攻めてくる、余の気分がゆるんでいた為、グーッと入られて真面一本見事に打たれる。先生の攻めに対しては切り落とし突の手の内で応ず、余は二本目の突に入る、互いに腹力、切っ先、間合いの争い、攻め合い、殺し合い、技としては十分なのがない、先生の腹力も余の腹力も動かぬ。最後に遠間となる、余は先生が動けば打つ構となる、余は先生の拳を真直ぐに攻め（下段より）真面に一本伸びる 先生は参ったという。

本日は腹力の入った稽古であった、約二十分。稽古直後、気分も左手も左足もつかれていない、之は気で圧倒されていない証也。

稽古後先生に対し最初良い面を打たれましたと言うと先生曰く、君の最後の面はよかった、あれは無心の技だ、ああいう打は思っては出ない、打たれて気持ちがいい、無理をして打てばあたらぬ事はないが無心の技は中々でない。

余が稽古の評を問うと先生曰く、あれでよい、打とうという気がない、打とうという気が無くてそこからわざが出れば名人だが中々出ない、以前は鋭い技があったがそれは打とう突こうという気があっての技だ、剣道は終極打つ気が無いという所へゆくのだ、ただしこれは人によると誤解する、打つ気が無いというのは隙さえあればどこでも打つという事である。

切り落としは、あれは切り落としてグッと突きに入ればこっちに響く（中山先生のように）、切り落としただけだから響かぬ、それは気合いだ。年をとれば心の稽古（間合いとか何とか）をせねばならぬ。自分は稽古がだんだんらくになる、結局そこだと思う。

A君に対し...君の稽古は立っているだけだからだめだ、自分が表か

ら切っ先を伸ばして入ってもジッとしている、故に置いたものを打つようなものだ、あれはどういうわけか、伸ばした所を小手を打ちさえすればよいのである、その修行をせねばだめ。

剣道の指導はむずかしい、相手の程度によって話してやらねばならぬ故に。

技はどんなに早くても知れたものだ、起こりを封じてしまえば打つ事は出来ぬ、恰も四斗樽の栓をしておくようなもの、中にいっぱい入っていても出す事は出来ぬ。稽古は相對峙してみれば表が強いが裏が強いかは分かる、表の強い者は裏が弱いし裏の強い者は表が弱い、それで弱い方を攻めればよいのだ。

国専学生に対し齋村先生の言

切り返しの受け方はむずかしい、相手を活かして受ける事はむずかしい、即、 浮かずに縁を切らずに受けるという事はむずかしいと。

3月2日 講談社にて持田先生に願う。

銅皿表満令油の気合いと一刀流の形（殊に二本目）

立ち上がる時先生が先、余は（一字不明）につく。先生は直ちに間を詰める、（切っ先四五寸入り）先生の気分先、余は腹力で之に対し引かぬ、余は小手或いは突にゆくも先生の構えは破れぬ、先生も余の構えが破れず互いに十分の技無く互いに遠間となる。

余の拳攻めは利かぬ、先生の攻めも利かぬ、先生より一本面を打たる、余、面に伸びるも不十分、大きく冠るも受けられる、突も利かぬ、互いに殺気と殺気との争い、五分の間ではだめ故、腹力でうんと攻めるが破れぬ、面を打たる。以上。

稽古後には両手首が凝っている、それは切っ先を殺され、余の切っ先が無理となるからだ、本日の稽古は最初の立ち間合いを誤る、持田先生の間合に入って知らずに頑張っていた。

鶴見君の言...持田先生に願うと互いに構えると麻酔剤にかかってしまう、遠間では起こりを抑えられてしまうし無理に技を出せば相打ち

で打たれてしまうし結局引くよりほか仕方がない、持田先生 あれは気分ですか、と。

持田先生曰く 「気分です。剣道は気分が先になっていると相打ちに打っても自分のほうの太刀はあたり相手の太刀は外れてしまう、面白いものだ」と。

3月3日 講談社にて持田先生に願う。

腹力と一刀流の手の内。

先ず一足一刀の間、対峙、先生は直ぐにグッと半歩入る、余は昨日この間で油断したので本日は用心す、この間は技がない故余は突にゆく、先生も突に出る、先生の突の方がよい、この近間において余の心境は打てという心、手の内は順皮の手の内、(手を伸ばし相手の太刀を表より抑える)技は出易くなり小手、面、に伸びられるが面なぞは届かぬ、先生に乗られ一本面を打たる。

後半 ...余は乗られた感、気は固まる感、尚下腹が冷えてきた、それはのぼせたのだ、先生より気分で押されて面を打たる。

一足一刀より半歩入った間は持田先生の間だ、ここで戦う事は余の負け也、対峙していても技を出しても。

3月8日講談社にて持田先生に願う。

対峙、余は三角矩定石の構え故腹力は十分入る、順皮の手の内にて表より先生の太刀を抑える、先生不動、表より余の太刀を払う。余の構えも不動、先生の太刀を表より抑え或いは拳攻めにて、打つべき隙無く、気も技も先がかからぬ、余は更に腹力でグーッと半歩入り面に伸びんとす、先生は腹力にて応ず、余が面を攻めんとする心の動きのところへ先生はスーッと入り余の胸を打つ(この技は余の心気が打とうという気にあがっていたからその気を打たれたのだ)。

次も同じ攻め方を余はなす。ただしこの絶対の間が破れぬ、余の気の留まる所を先生より面を打たる。同じ所で余の気の留まる所を面、

又は小手を打たる。

本日は先生に対し一本も当たらなかったが足、腰、腹力は大丈夫也、凝らぬ、手の内も固まらぬ、但し稽古中竹刀（165刃）が重いという感がした。持田先生曰く、今日は気も技も先が出なかったと。

反省、気分態度はよいのだが、結局持田先生の間合いで稽古したのだ（終始）故に先生よりは近く余よりは遠し。

2月18、19、両日齋村先生に願ひし時は技としては一刀流の拳攻めが役立つ、このため先生は余の間合に入れぬ也、切り落とし突きの手の内も役立つ。但し持田先生にはこの技は利かぬ。（つづく）

## 著者プロフィール

---



小川心耕（本名/昭）

昭和10年、東京生まれ。慶応大学経済学部卒。明治生命勤務。在職中に清和剣友会（巣鴨）創設、少年剣道指導に当たる。定年退職後、(財)ダイヤ高齢社会研究財団認定エアロビック・インストラクターとして高齢者の健康・生きがいづくりに従事。平成22年、人間禅丸川春潭老師に入門。